

里見八犬傳

第六輯

卷一

~13  
709  
26





曲亭馬琴著

明治二十六年十月九日購求

第六輯

# 八犬傳

東京名山閣版

門遠 13  
號 709  
卷 26

八犬傳第六輯有序

善書堂

予所著八犬傳一書。此焯夕冬夜。戲墨曩  
謬為書。賈山青堂所刊布。雖未足使楮價  
踊貴。而於書賈頗有贏餘焉。且暮以此為  
搖錢樹云。自是之後。屢續稿。而至第五輯。  
時山青堂耽於他事。乃不果。俛仰之間。光  
陰荏苒。越歷四五年矣。今茲書肆涌泉堂。  
購得前書。剞版又揣刻。一日令山青堂為



人告諸予乞代續梓。誅求數四，得得不已。予爲其言有理，漫然領之。將創餘稿，以充銷夏之料。然無有宿構也。偶其所，有皆忘之矣。因沈吟構思，然後費燈油者，每夜一二盞。漸費至一二舛，則稿了一卷。弥費迨斗許之夜，稿了者總五卷。其多五卷，措數最多。遂釐之以爲二本，編纂共六本。手稿竟完矣。輒授之于涌泉堂，以登於梨棗。其

書畫二工，依故出像，則柳溪二子所畫。淨書乃田谷兩筆錄之。閱五六月，而書畫盡成。嗚呼涌泉堂性太急，自克促工，而無虛日。及劂人告成，又乞類予之自序於簡端。業在倉卒際，不遑含毫，且回思即便述本。輯稍久而出世，趣代序以塞其責。

文政九年菊月中，澣書于著作堂兩牕。

曲亭蟬史





南總里見八犬傳第六輯總目錄 本輯全六本 終六十一回

卷 壹 第五十一回

兵燹燒山走五彦  
鬼燐助馬導兩孺

卷 壹 第五十二回

高屋暇悌順搏野緒  
朝谷村舩虫贈古管

卷 貳 第五十三回

烟上謬捕犬田  
馬加竊奪舩虫

卷 貳 第五十四回

常武疑囚一大土  
品七漫話說奸臣

卷 貳 第五十五回

馬大記賺言途窮籠山  
粟飯原滅族里遺犬坂

卷 三 第五十六回

且開野歌舞暗遺釵兒  
小文吾諷諫高論舟水

卷 四 第五十七回

對牛樓毛野鑿譬  
墨田河文吾逐舩

卷 四 第五十八回

窮阮初解轉遭故人  
老實續主家報舊憂

卷 五 第五十九回

京鎌倉二犬七憶念四友  
下毛州赤岩庚申山紀事

卷 五 第六十回

胎內竇現八射妖怪  
申山窟窟鬼託觸體

卷 下 第六十一回

敲柴門離衣訴冤枉  
辨故事禮儀告薄命

總目錄終

八犬傳六輯卷一

誦泉堂藏



八代轉山野翁

四 朝長之藏



戸まき

河田助友

坂田金平太

井貞九郎

鈴子

四高

女町樂

野野

三

若無銀手

煙語野郎



抽角九念三

千葉才助

馬場五郎

三

犬坂毛野龍智

いふ丸

たまご

若無金士口



馬如大記常武  
一箇圖壯年之像也

伎似賢者  
巧感衆愚  
砥硤混玉  
懼紫奪朱

卷一

栗飯原首胤度

重信



左之海より右之東の方  
法よりよりなる也

母分別  
之何也  
松魚  
乃  
人を碎  
以る

笠山逸東太縁連

船虫

岡泉







豔而節操  
命薄情篤  
劈身伴雙  
返壁瘞玉

あまのこ  
あまのこ  
あまのこ  
あまのこ  
あまのこ

泉

節婦  
雛衣

大村大角礼儀  
小字角太郎

八犬傳六車卷一

八犬傳六車卷一

鬼の  
鬼

妖  
怪

七  
編

七  
編

山  
の  
神

土  
地  
の  
神

土  
地  
の  
神

ス  
タ  
マ

ス  
タ  
マ

角  
大  
郎  
の  
母

角  
大  
郎  
の  
母

一  
角  
の  
後  
妻

七  
編

七  
編

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人

古  
那  
の  
隊  
人



坊賈之捷利素其所也。而猶有甚焉者。若拙著常世物語。三國一夜物語。二書其刻版係于丙寅之燬。或為鳥有或亡其半。曩一賈豎補刻常語之闕。又翻刻一夜語。然不告諸予。乞校訂。擅改易常語書名及出像。而今是如新著。是以多不與舊本同。加之其文誤衍亦多。拙劣不遑毛舉也。初予不知之。客歲涌泉堂購得常語補刻之梓。而乞予校訂。於是予駭嘆久之。無所漏憤。譬如汚衣之油。屢洗乃耗本色。迨今又莫奈之何。且也。一夜語翻刻。雖未得見新刷。而推思之。則亦不與舊版同可知也。願廿餘年前。戲墨吾豈敢懸念耶。但見賣名之憾。不得無言也。因贅數行於簡端。餘楮。曲亭主人再識。

南總里見八犬傳第六輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第五十回 兵燹山を焼く五彦と走らま

再説上野西甘樂郡荒芽山の宿。道節主従。隠宅の白井の城兵既。程遠くを寄はる及び。借平音音ハ道節亦の五犬士と。延々為。夫婦寄。防。留め。戦没せんと。存。一。手。單。節。も。共。侶。死。と。以。決。め。五。犬。士。の。後。小。登。江。送。小。諫。め。争。々。言。果。へ。う。の。ゆ。は。道。節。頻。り。焦。燥。せ。世。四。郎。借。平。を。音。音。ハ。必。死。の。覚。期。ハ。皆。是。忠。義。の。為。中。七。志。は。し。ま。視。み。餘。彼。大。敵。を。老。丈。婦。亦。御。げ。が。そ。い。ろ。ま。ゆ。柱。の。死。況。と。申。手。單。節。亦。小。慙。小。退。を。死。と。盡。す。の。ま。ら。ゆ。ゆ。も。大。山。道。節。等。ハ。命。を。さ。す。老。弱。男。女。を。送。り。脱。去。し。る。と。後。々。も。敵。の。い。れ。バ。



恥亦これまほなる事。さういふは汝連落よといふも後々も。よまきつれ亦思念の  
 世四郎音音のふら龍と。きりく奇の敵と標け吾們の七八反背の山邊に退死て  
 樹下暗に彼方より不意に起る横さる敵の左右を撃崩さ。這奴亦必度を失ふ  
 躬方子伏兵のこもる當下逃る敵兵をよれ程に追捨る。僉共侶のちも他郷  
 避く時を俟は只今死するまほさる。さういふの浅いものと論し。左右を乞と刀入れ  
 信乃莊助現ハ小文吾等の齊一掌うち鳴くと説得の理の極め妙あり。敵  
 兵の足らぬ雜兵を我人敵捕て死するとも。高階侯の珠をとり雀を弾く異  
 ねらむ匹夫の勇いさうさるのを。といふ道節悦び。ゆらぎ先を奔走不便ホと  
 とく馬より乗して。嚮中も謀し合せて。渠等がうへ左の右も。大田ぬと煩さ  
 よ來去を相謀ひて。姥雪夫婦り共に行徳へおく還る多と憑むと小文吾等  
 のまを。さういふ。とく乗らば。と縁頼へ馬の鼻つる牽よと。或も單節と合

鞍。さういふ。とく乗らば。と縁頼へ馬の鼻つる牽よと。或も單節と合  
 せ来る敵とまも常葉の老夫婦。借平音音へ今ゆり争ひ難く。焼草と家の  
 内外に積寄せ投入を。案山子ねらる。圓竹弓も。俄頃準備の細竹の征箭。伐盡  
 しく。携る。さういふ。とく乗らば。と縁頼へ馬の鼻つる牽よと。或も單節と合  
 いそがれ必死の覚期を。哀さる。斯有。程小道節。信乃現ハ。莊助亦背の山邊に  
 退死。小文吾共侶。露深に。茅萱の中。埋伏れ。敵のと遅くと。俟程に。推寄來つる討  
 ちの軍兵。極実の只。狐屋と。稻麻の。と。捕巻て。咄と。囑る。因の。声。早雄の。兵卒。ホ。走。入。ん  
 と。と。ける。庭の。折戸。は。殺。梟。る。二。宝。平。駄。一。が。首。級。を。る。忽。地。鬼。胎。と。抱。死。け。ん。左。右。を。進  
 む。さういふ。とく乗らば。と縁頼へ馬の鼻つる牽よと。或も單節と合  
 郷。同。類。の。援。よ。と。く。不。思。議。な。網。漏。る。と。い。ふ。も。一。味。の。奴。原。共。侶。と。の。処。を。躰。れ。る。と。い。ふ。  
 密。訴。の。と。定。ふ。知。り。斯。其。勢。を。と。捕。籠。る。の。助。友。と。認。送。れ。ば。名。告。ら。ば。と。い。ふ。



膽を徹して本更へ後へまつらん。かまも窮るる身の命運も、龍の鳥檻の獸も、  
 多くは縛の索も係の同類の命の時冥に依て免え、何と何と呼れども軒端をかま  
 松風の外に心なきけり。助友焦燥で塵を揚、蓬た敵の逃足も、武士の他法も、  
 足は空の回答も踏込、討捕せりと烈下知、先隊の雑兵も、  
 ゆき群も競う竹縁と踏落、ゆれ先も走り入ると、程も箭来と護る、  
 雪夫婦が間近く敵を引、障子隔亮の間より差詰、齊射せ、征箭の裏、  
 せと至る程も先に進、五七人、矢庭を貫射倒れ、枕を臥、  
 辟易とく人を小盾に打、揮、色めく敵も息も、  
 うはれ、撥とた、引板の鳴子の群、雀稻の穂も、風騒だ、返さ、  
 べうもゆき、れい、助友眼を睜ら、いひひ、共る、  
 る、こ、あ、あ、退る進めと罵る。声を、  
 破障子遣戸、  
 放ち踏、  
 ゆき、  
 雑刀、  
 松、  
 物々、  
 萬夫、  
 後、  
 り、  
 侶、  
 老、  
 彼、

放ち踏、  
 ゆき、  
 雑刀、  
 松、  
 物々、  
 萬夫、  
 後、  
 り、  
 侶、  
 老、  
 彼、







進む向ひく。怒まる声。ゆり。葦。杖。助友。こぼる。れ。汝も。雙言の。隻。別。る。と。敷。漏。る。る。の。み。送。恨。ら。び。本。夏。と。ん。せ。ん。む。と。罵。り。ま。う。抜。く。も。尖。く。う。ち。振。る。刃。の。半。輪。の。月。鉄。氷。影。影。添。添。四。大。士。も。亦。相。割。け。共。刃。を。首。先。め。か。り。敷。ひ。ん。と。進。む。を。助。友。を。彼。射。く。僵。せ。と。下。知。ま。れ。左。右。は。後。に。許。す。の。精。兵。齊。一。弓。を。彎。固。め。切。く。葦。せ。い。糸。箭。も。怯。ま。ま。と。う。ぬ。五。大。士。の。打。落。し。破。捨。く。よ。り。ま。裏。を。の。ぞ。よ。け。り。と。と。前。計。合。期。せ。今。助。友。を。討。捕。ら。む。と。四。郎。音。音。を。拯。ふ。由。な。し。自。餘。の。端。武。者。も。目。を。被。そ。と。送。ふ。叫。び。激。く。矢。石。を。犯。ま。奮。奮。突。戦。面。も。揮。く。ま。駈。散。く。ま。死。を。只。一。擧。め。極。め。は。勇。士。の。大。刀。風。四。下。を。拂。ふ。五。大。士。一。処。は。聚。ひ。又。五。所。に。立。つ。れ。前。は。顯。れ。後。は。隠。れ。秘。術。を。竭。ま。巻。の。刃。は。血。の。涿。鹿。の。野。を。浸。し。紅。波。の。盾。を。流。ま。ま。く。斫。仆。さ。れ。る。雜。兵。の。死。骸。の。算。を。乱。ま。か。ど。如。く。き。の。ふ。も。倍。を。五。大。士。の。ゆ。も。烈。し。た。刀。尖。は。崩。れ。立。る。癩。な。れ。逃。る。躬。方。は。

推著られて助友は疾走すと透さむ追敷く五大士の背は起は一隊の軍兵中のも一人高く叫びて逆賊道節小且く等巨田新六郎助友は返せ返せと呼ぶ声小五大士齊一駈きまら後方を信とえられむ打扮の寄母の大將彼も助友とも助友面影はよく肖りそれらも助友も逃る敵を追捨く近く敵は駈向へ又引返を己前の助友隊勢を進めく先後より引夾を毛攻りける時小母屋のく不當多く俄頃北邊の猛火の光は秋の山風吹暴く火敵飛散り飛程に樹木を焦し草を焼く煙は堪ひば敵も躬方も別々なるまて頭の上は降ゆる火華を拂ひのむく周章大かこるるけりこの時小母屋も五大士前後の敵は隔られく相距ると百歩二百歩或は岨の石あり在り或は巖の井陰小をり火の道芝ふらのまければ輒く聚合し由まればとも思ひある信義の心鬼天うち仰ぎ嗟嘆は堪む憐れく姥雪夫婦ら



今も家火を被く共煙とるけん彼火の故俺們が田を解くも  
死を脱す時不似るも亦是夫婦が忠義よれ然るをその存亡も極め  
づらん送憾敵の猛火は度と喪く路の閉けを幸ひまれや煙を犯しても  
母屋のく不近へ死く焼迹なりとる幸くわしうせまうと云云より合さるど友  
たちの心意の一致と踏ゆく路を水きども風のいしく烈くまりく西吹の東  
の南へ巻て北は旋る音凄く沙磔と飛くと山林過半焼つて死勢ひ犯り  
けれ母屋へ赴くよのけら五犬士在つる休もひらは取集合ともゆる武尊駿  
獵の火田單火牛の謀もこれありそまらざるやとて數百の敵を恐れさるも舌を  
掉め送る手と抗意と示る下圓山をうち踏て煙を避む草木と共に焼をんく  
とくと招け招く繁き草萱も風小焼立られて通し路をのみぞ火燄をま  
ま散乱して彼此とるく犬士のりとも向る隙る降めれば襟袂は燃ゆると

拂ひ落しう接滅ともる生憎は焦熱の地獄の責み異なりとる中道節の  
火遁の術をみづる非とて今朝も破棄され甲斐もよわその術のりとも  
身ひら遁れ何れせん圍の解けて火小焼もみる是過世の業報とんとあひ  
定めつるく観念の外なるものく犬塚信乃がほとり降る火燄の珠ゆふ  
多うけれの要時の場も右へ走り左へ避く身の狂へも心中正しく思ひけ  
よりのく骨納めり村雨の大刀をぬび引抜てちうの限りうち振る刀の奇  
特件は刀尖より濃水氣の遠く散乱して百歩二百歩ある道節現八  
莊助ホがやりの閃や火燄をうち滅され落てたり當下信乃の声あり諸  
君子これをえぬむや火急の難義よ心まひくこの大刀めを忘れら肩を引入  
向の壁も似く思ふたこの刀とて道芝の火をうち滅くと山を越てん續死あへ  
呼くくも刀をうち揮打ぬらひ入る山も數るぬ高た奇特道節ホを復







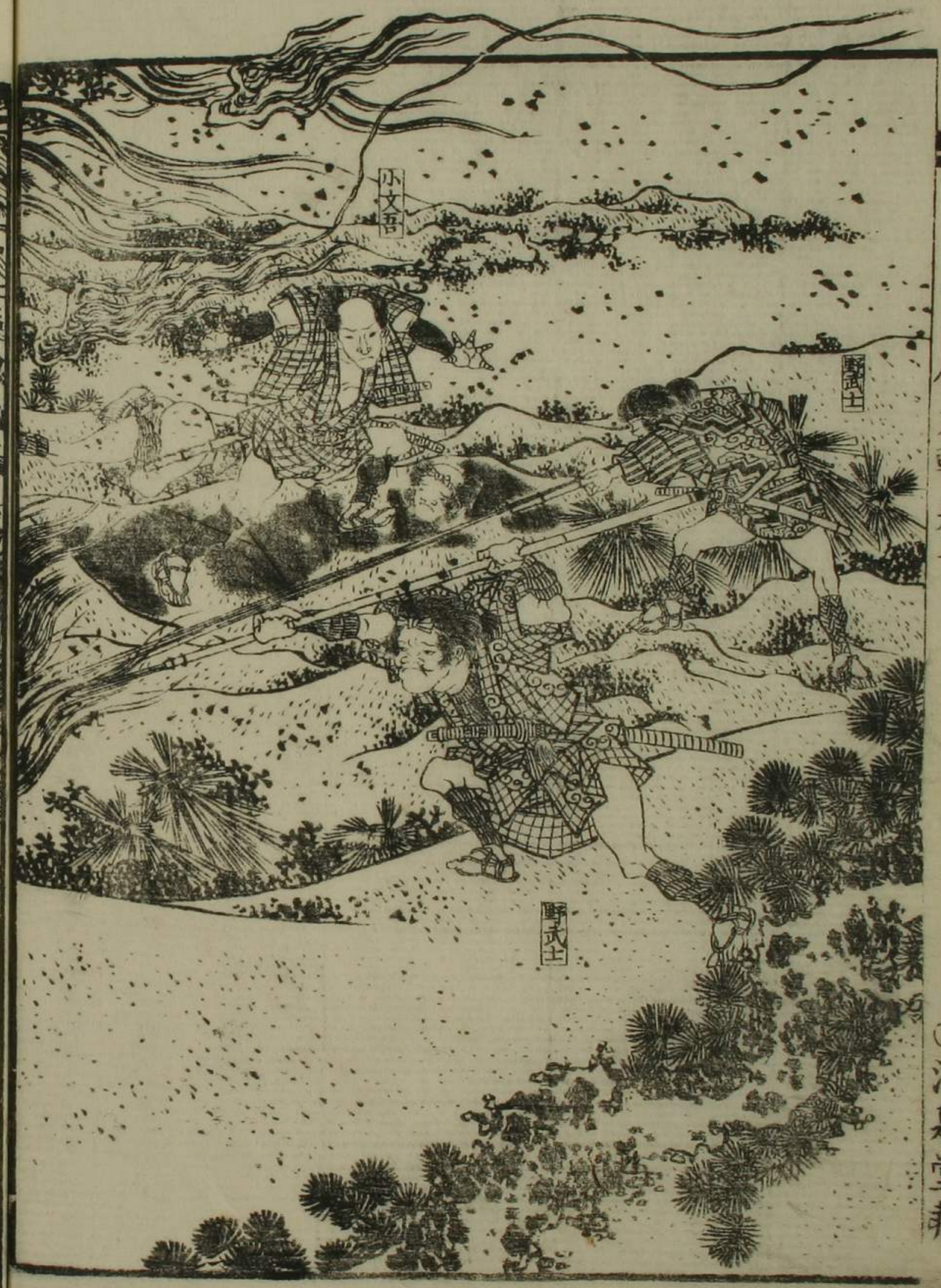
煙は狂ひ樹を遠る馬の頻に嘶なく前脚高く幾遍とる跳揚れいとく鞍  
 安らぬ妖婦只眼眩に宵渡れ吐嗟々と叫ぶを林がうも軟弱々と馬より  
 先は疲芳果く心地死ぬへ鞍壺とて俵甲の俯を折ら寄りの雑兵西二名  
 煙を犯し走り来る馬の絆よと破れ曳の単節は又ゆら不獵場の野鶏の  
 箭よとみ雁鳥は寄るあちと吐嗟とをり共は頭を擡る程もわれ小文吾の  
 只飛が如く走り近づく大喝一声左よ立る一箇の敵とばをむんと破れ  
 残る両兵の放馬は見えぬ大刀と抜翳し前後奔一小文吾と鞍を脱速く  
 閃りと翻し身を沈ませ外せ狂刃と刃窟の前羽てまも馬の絆と礮と所  
 断られて馬の同胞と棄せたるは衝と脱く走る蹄の音高く東とてを放れ  
 小のくいふとをり小駭をるる小文吾も又の敵の雑兵亦も不あきれも今ゆふ  
 牽駐る小暇をり房く駭の二箇の大刀音小文吾のあもあも心頻り井可立

また奮勇は倍々千倍と又一人を破倒し肩踏込内めり刃の下み残る  
 敵の首の忽地前小落く軀の仰反仆とをりもせむ放れ馬の迹を本之渠  
 程は荒芽山の麓路の近郊の野武士七名嚮白井の寄る響が田の声を  
 づより落人を刹畧んと東の巷小聚會をり浩処は放き馬の両箇の女  
 子を乗しる俵よと馳来ると遙ゆるちを竊み脱び衆皆前路に立  
 塞りく鉤索竹槍桿棒とをり合し柵めぐ捕駐んと志り小馬の頻  
 り小哮狂ひく人をも藩埒をも衝破る勢ひ尋常さざれば準備勿心地相  
 違くと近づくれい齒仆され或は蹴られ蹂躪られ矢庭は死するもの一兩人半  
 死半生のものも三四人よ及びりどる肩を悪るるの總は二人のをりけりはれ  
 とも不敵の奴原され一人曹は著るり小筒の鳥銃取む火蓋を断る  
 撞と放せはる二四十間隔を馬の肛門のゆりより強梁をむけく打板を





落人を奇  
 貨とす  
 のが  
 野武士等  
 放馬と撃つ





両箇の主と乗一る伏よ四足と折を伏うける。さあこそわろを彼女子ホと逃ぬ  
 ぞと鳥銃投捨れ彼槍と引提く走りぬると折う怪むく西團の陰火  
 何処とわぬく凶死來く伏する馬の頭の邊に墜留るとする程は馬の勃良と起  
 わりく體戰あつ馳ること下めの駛もりやましくわれどといひ隙は往方も  
 あらむるりおけり有介程小文吾ハ稍その邊に追蒐來つ遙小馬の駈れれ  
 形勢陰火の奇特も目苒アハ只音驚馬嘆し馬の往方を知らんとありハ  
 喘だくまき足音小呆れく立る兩箇の野武士齊一後方をえりくわりのま  
 彼奴も落人ハ馬共侶は追來けり女代ま物せまると長く間も星奪略忽  
 地路を要る多く槍と拵く突懸るをまろゆりくと小文吾ハ左は槍頭を握り  
 留引抜く刀小右は槍の真中丁と砍落ま本支は駭く野武士ハ槍投捨て  
 左右より利腕と捕て奪と組む小文吾駭く氣色もまろくまろ左は取る腕を刃と

衝て立てる伏よ一推搦する角瓶の秘決曹と拵て揮解死徒倚く項と雙のよ  
 搦搦と又引よと頭と頭と西二遍撲合さるる地難て苦と叫ぶ声ゆる共小  
 足空さぬ小差揚て地上へ控と狗見放下譬小似る風下へ籠落一の野武士ハ  
 ひとら処小累り伏く石小鼻つら株は額うめく夢歎とをり小苦痛不堪む  
 蠢だく起んとると小文吾ハ疊鬼ハ勢大刀風ハ一葉の露の玉掃管ゆり  
 身とを四とねるら積る兇惡のむくひまよけん天の細七重を風吹くふふの  
 天引く遠煙百千の團も萬みる火宅を死と悟するをを知らぬを量劫數盡  
 されぬ煩惱の俺も狂意馬心猿は智の鞘を取留て曳草草路の秋草踏死  
 往方も定めぬ死まよかきく一憂る小身の疲勞まよ草路の秋草踏死  
 索むくま壯士が心の誠比る死犬とハハの数十日は近たぬ月筆は載てん  
 是仁惟義忠信礼智孝悌を磨あける玉ハハのれハハと疎幽ハハりけり



第五十二画 高屋驥は悞順野豬を搏せ 朝谷村は舩虫古管を贈る

却説犬田小文吾悞順の途に野武士等と斫棄しより只管馬の迹を逐て東に  
望み走る程ふその日も佩る暮春のけり。昨鬼通宵今鳥終日或の數百の大敵と  
鏢を削りし又幾里の道を行く。索る人遭ぬ憾し心は身ゆいといふ。飛芳  
より。あつ何処と里人は言問へるも葉をり。冬青の株は尻うちやと獨情  
かり。今朝も荒芽山の閉戦は兵火彼山の土毛を焦く。敵の圍の解く  
時豫て契りしより。われは犬山犬塚ホの人々の山うち越て西の方信濃路へも走り  
けめ。然るに放ちて馬もあつ。これの東へ道の程より。まゝも八九里秋を十里ゆも  
及ぶ。なうらんか。まを芳と功もま。友別れて又いふ。ふ。預り。る。曳。單。節。と  
その甲斐もま。喪。て。り。や。この後道節ホは環の日の還る。ま。とも。れ。又。何。の

面目のり。信のり。義のり。人とせられん。嗚呼是非も。何とせん。の。ま。ま。と。ま。ま。  
又く。瞻仰る。天の夕月。夜曇る。影。胸。狭く。雲。ぬ。心。の。迷。ひ。思。う。れ。と。身。を  
責。め。お。ひ。く。ら。尋。念。を。な。す。嚮。は。彼。馬。の。馳。たる。野。武。士。の。鳥。銃。を。數。れ。よ。  
い。も。怪。し。光。物。を。の。り。と。り。隕。り。馬。の。忽。地。身。を。起。し。復。奔。る。と。前。の。如。く。  
駿。足。を。十。倍。と。往。方。も。知。ら。む。り。の。件。の。親。子。丈。婦。の。義。烈。を。神。明  
佛。陀。の。憐。み。を。祐。め。ま。の。ん。む。ん。如。此。有。ん。あ。け。の。遭。む。と。も。恙。あ。ら。ん。と。ま。ま。と。も。  
然。と。ま。ま。と。止。ま。る。あ。ら。は。露。宿。を。て。ん。の。還。て。人。の。怪。し。め。られ。ん。一。椀。の  
糧。一。夜。の。宿。を。求。め。て。も。と。肚。裏。の。處。分。既。は。決。り。け。れ。ば。樹。下。と。う。ま。と。一。白  
屋。の。宿。投。り。の。形。を。夜。を。曉。し。り。さ。れ。ば。又。小。文。吾。の。次。の。日。は。旦。未。明。の。旅。宿。を。出。て。  
前。路。々。々。の。或。の。旅。客。里。人。ホ。は。馬。の。往。方。と。外。め。り。く。これ。彼。と。ま。ま。諸。不。終。之。便  
宜。と。い。ひ。り。く。望。と。失。ひ。く。且。疑。ひ。且。恥。と。只。管。涉。獵。の。ま。ま。と。ま。ま。二。日。四。日。の。



ありしは来るとも知らむ武蔵多法草寺の程近に高屋阿佐谷の村回る。  
 田圃の閑より過ると秋の日に短く下晡まきけり當下小文五の笠と斜に  
 推挙てせり四下と眺る新堀湯島神田の衆山高く西北に連りて樹木の葉は  
 まご染ねとも夕日は彩る速景観く宮戸隅田千住の長流南北の横なり細  
 引の声のびえぬとも早暮の葉近村寂らう向上まれば幾群の秋鳥雲に入ら  
 還るも直下せり千頃の稲田花を合せて戦ぐの露の道せし玉を磨る菊と  
 藪蔭に金と欺く人音は駭死花の星とぞ鳴んと欲し紫山子小狎く  
 かよ鹿の圃と暴しく饑さるる。就たせよよろく皆是旅泊断腸の  
 煤るこそとふめれる。あの河ひら打渡とて下総國よりくつが舊里へ  
 遠く忘れぬせぬ前月廿四日の曉さふ犬塚ホを送るとく市川より漕  
 出せり一兩日の行きとせひ一ののをおひきま犬川が窮厄より只殃危

のく黄縁ぐけさるる還るるんといふ父もりか姑も、大聖も飛虫崎氏も  
 かよとてさるる待不樂のひけぬ大八ひとり小慰るて益る老の諄  
 言より房八が縁由人よまられて又さふ。よるぬいぞ未のせむや親小相と共  
 まるは寔ふる不孝の親戚交遊とれ彼と約束の違つる信るるに似る。  
 ゆくゆくままでまあるふ翌の夙めく行徳還りと情由と報死状のくそれも  
 影護し曳の単節が往方のまればとて休中と舊里へ立ちりくと犬山  
 るとよるれやせん。とて。一。月。二。日。新。堀。婦。ホ。と。索。も。の。ゆ。の。中。山。道。と。ち  
 登りて犬山犬塚四箇の友と索く環會人日は緯如此々と報て後親の安否  
 と。回。へ。ま。け。い。く。それ。も。四。箇。の。友。小。再。會。の。月。測。く。つ。進。退。谷。の。死。け。ん。馬。の。再  
 生。く。奔。り。奇。特。の。有。さ。く。と。を。死。と。い。ふ。人。も。遭。り。て。他。る。日。と。送。る。つ。か。う。人  
 たり守らせぬ神も仏もまた世狭といひつはて夏虫のひとり。おけが宿小帰家。









八代傳六郎卷一

廿一

月夜

八代傳六郎卷一

月夜



絶つたのんむらん車ひまゝと肩ぬよとせ生るゝものゝし。これ角舩を好  
 ろうふ素より撲傷の奇菜ととり。撲れて刺絶せしものふとく即功あるをりく。  
 一日うとも身をまささば。舊里を出る日もを懐きあう。いふ失りまへ今更あらん。  
 用ひくえをよと遠く行袱を解披たぐわちとちと素る小件の菜のきりけり。捨  
 服紗の内あつとそ又肌糸の財布ととく。せく端引揚て揮ひ出まふ。嚮ふ登崎  
 十一郎。里見殿の貲禄とく。強く贈り。一包二十兩の沙金の。先滾々と  
 出へ。これを取て管笠を仰さる。いへく入措たつ。ぬまひ財布とち揮ふ。果  
 しく件の奇菜も出たり。もをよれ。絶小撮取りて踏仆る。彼男の口の中は入れをば。小  
 歯といへく咬締て閉へう。ものざれが腋挿の刀小附る。斧を抜とりてややく  
 口を推開く。菜を送りて。哺ら。懐帛を推圓めく。臂近る。思の水小浸し。く  
 口中小紋り入れ。菜を胃中へ推下して。喚んとする。小の名を知らね。只喃々と呼

活る。小且く件の男の苦と嘔吐。眼と睜。却る。鎗と直。刃を起して。忽地走の  
 去らん。とまると。小文吾。急は抱た縮めく。や。俟ぬ。いふ。このあり。これの旅。あつ。の。れ。る。ふ  
 和殿の。殘。仆。ら。を。過。ま。よ。忍。ね。が。箇。様。々。々。小。人。抱。せ。し。甦。生。せ。し。て。本。意。は。稱  
 へ。り。あ。り。よ。和。殿。の。老。方。野。猪。を。掛。ら。れ。る。小。の。あ。ら。る。や。これ。も。亦。彼。方。の。く。如。此。々。々。の。野  
 猪。の。む。ひ。ぬ。然。れ。も。怪。我。の。功。名。を。辛。し。と。撃。つ。魚。を。疑。ふ。共。侶。は。誘。つ。た。れ。と。見。え。り。  
 と。の。れ。て。放。馬。く。件。の。男。鎗。投。捨。く。跪。坐。し。原。来。を。見。え。り。再。生。の。恩。人。を。と。せ。し。と。  
 既。は。賢。察。せ。し。る。如。く。其。も。先。の。程。野。猪。小。一。鎗。著。し。れ。も。胸。所。を。外。に。し。け。ん。  
 忽。地。鎗。を。振。解。れ。勢。力。ひ。當。る。も。あ。ら。ね。逃。れ。と。せ。し。と。それ。を。く。愧。ら。む。果。敢。て。牙。を  
 掛。ら。れ。て。空。を。は。は。投。ら。る。と。思。ひ。後。へ。東。西。を。も。覚。む。の。て。今。や。な。く。つ。れ。返。つ。し。  
 より。又。の。や。野。猪。小。掛。ら。れ。ん。と。そ。足。の。ふ。ど。く。狼。狽。し。ん。嗚。呼。と。い。ひ。ん。今。更。は。面目。も  
 る。免。趣。舎。之。刺。苗。の。ひ。彼。野。猪。の。何。処。あ。ら。い。と。向。き。て。小。文。吾。う。ち。領。た。遠。く。の。の。こ







呂れむや 大約廣澤淺草よりとてきき戸金曾木阿佐谷高屋千束の村々  
 みる石濱る千葉殿の米邑をゆか敵より同者の用心とて他郷の人を留る  
 ことむらうた他法あり況く獨行する宿まるものゆりむせめりゆの御恩報  
 村長より由と告ぐ某相計らん障りあるもゆれば扱もせん何國より  
 何國へ通るせめやん名告るせめと慇懃と問れて小文吾一談及いむ吾侪が  
 故郷に下総ゆく大田小文吾とゆらぬ此度上毛に赴たり又て後才女同胞  
 相伴ひ合鞍を乗せしを折る馬放れて往方とまを渠ホよる逢人の迹と  
 追ひく末つれども便宜とゆらるる現獨行とゆらぬの里でも然るゆのゆ  
 わねどもとて緊した法度ありあらとあらねば日の暮る宿投宿難  
 るんを和殿は遭へ他生の縁あらば一宿を憑きとていふは終に並四郎といふと  
 易にゆるるる管待とてあらけれ女中の往方と近郷中向定るゆとて日

返留るゆも版のさるる進まざるはひそまより直に宿所まで伴ひ  
 なんとゆどもゆせん今宵この休みの野猪とち捨て置るる狼の腹せられん  
 某この獲物を村長許引揃ゆてこれらのものもか月のゆも告て迹よりまへへ  
 この際とゆたぬけて鳥越山の根より東北へ三四町赴たぬ阿佐谷の村盡死る  
 東のこのいと大なる榎樹の根より小のちひさなる幹浄房ありの耶まう宿  
 苗中の舟船虫といふ女房ひとりもゆたぬ如此々と告ゆ拒むるゆねども倘  
 疑ふ不便るんよこれゆゆたぬと辭せりて説示りし腰に著る燧付衣と  
 そが休よりて遮りまはるる小文吾の好意のよろこびと述て立別れ阿佐谷を  
 望み赴くゆひより路の近くてすし小違ひを村盡死る榎樹の根より幹浄  
 房の七裏面より燈火の光幽に洩るるあるとて立寄りて折戸を敲れて呼門  
 誰とて心で指燭を秉てゆく折戸を叩くゆこれ則別人を並四郎が







釵を抜出し額髪を掻く癖あり男帯のゆりたるを腋下に結垂ても禪の綺  
 羅あつたよ単衣の袖も身幅もいと廣く長身の良人よ貸て被せ入為欲込代  
 被る秋るべし小文吾とこれらより腹裏あひあつたのわづらぐ為体百姓  
 らば商人も抑亦何をして生活よまを中らんの俠客の類も表彦道も  
 欺くとの博徒の煉るものさき秋とてまればかものわづらぐの苗も人妻とら  
 對ひをむり心苦しめたる。さうる死宿と取りぬらると竊に困して不意に受たる  
 のこと飲さうと船虫が云々と浮上るも許さうと己をぬぎ二度過らるを  
 推辞てゆび受むとさうる行も更困て夜の名支の比まらうと船虫もこのこと  
 とて挑子も膳もとり納めり且しと納戸より懶推してゆく來つ喃か客並四郎も  
 還らねど今宵えし二更の撞へいざ臥尊と儲えん此何方もあらせめて  
 いよと小文吾はあはむる懶のそは佇置あわづのりぬる臥房よりゆるる

影護た所ゆり月且く俵んのこと推辞ハ船虫微笑さくある物も尻刀柄を  
 あり並四郎の野猪の賞銭をど得らん友達さへさうら聚合く酒飲  
 曉も測るる然らでもをり夜提まきりぬるも俵の要る  
 所ゆりごとくとしそりて近江木綿のみぬえ寐物語は敵もる小横  
 披たる木枕の盧生が夢を一炊のわられゆりる懶の色色紙當る菅薦の十  
 府もるる六布七布足るぬ釣緒は下締の細細解て結び垂兩戸縹々  
 障子を圍て燈心減らして行燈の懶と隔の枕上もるは休らひぬと告辞  
 へ出居る紙戸ををり立籠て庵福のさう退出たりさる程は小文吾  
 行包も二腰の刀も枕に引著る躬て懶あふりさうと蚤責られ蚊は叫れて  
 睡んといもゆられぬ船虫もをり納戸に入ると熟睡や春人音もせむ  
 沙庭に聚る虫の声障子は響く竊虫の生憎は耳のつと親の友のつと









八代傳六車巻

〇六代傳六車巻



侍れども欲<sup>ち</sup>感<sup>ふ</sup>て命<sup>の</sup>親<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>寝<sup>を</sup>頸<sup>と</sup>と搦<sup>と</sup>と計<sup>を</sup>。天<sup>の</sup>討<sup>を</sup>競<sup>を</sup>。面<sup>を</sup>報<sup>ひ</sup>  
 末<sup>を</sup>還<sup>て</sup>。おん身<sup>の</sup>敷<sup>を</sup>れ。よとせめてもの罪<sup>を</sup>滅<sup>す</sup>。うらめしむといふも。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 くらよ似<sup>れ</sup>れども。つらかおん身<sup>の</sup>より。村<sup>の</sup>長<sup>で</sup>。ゆり。二<sup>代</sup>前<sup>の</sup>祖<sup>の</sup>時<sup>に</sup>。身<sup>上</sup>の。う  
 衰<sup>く</sup>。日<sup>も</sup>地<sup>も</sup>過<sup>半</sup>。沽<sup>却</sup>。村<sup>の</sup>役<sup>を</sup>。義<sup>も</sup>人<sup>は</sup>。譲<sup>り</sup>。水<sup>を</sup>飲<sup>ま</sup>り。侍<sup>り</sup>。くも。おん身<sup>の</sup>農<sup>を</sup>  
 業<sup>の</sup>棄<sup>て</sup>。おん身<sup>の</sup>親<sup>を</sup>。男<sup>を</sup>見<sup>さ</sup>。れ。おん身<sup>の</sup>並<sup>四</sup>郎<sup>と</sup>。塔<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>行<sup>も</sup>。二<sup>親</sup>  
 世<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>人<sup>と</sup>。より。本<sup>性</sup>。わ。る。良<sup>人</sup>。の。放<sup>蕩</sup>。酒<sup>と</sup>。賭<sup>と</sup>。よ。舊<sup>川</sup>。水<sup>を</sup>。田<sup>地</sup>  
 田<sup>圃</sup>。み。没<sup>却</sup>。生<sup>活</sup>。を。おん身<sup>の</sup>女<sup>に</sup>。伎<sup>倆</sup>。の。彼<sup>と</sup>。と。おん身<sup>の</sup>耳<sup>を</sup>。入<sup>る</sup>。おん身<sup>の</sup>  
 目<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>口<sup>に</sup>。諫<sup>れ</sup>。おん身<sup>の</sup>折<sup>を</sup>。先<sup>非</sup>。と。悔<sup>て</sup>。おん身<sup>の</sup>白<sup>を</sup>。糠<sup>を</sup>  
 釘<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>疎<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>任<sup>を</sup>。女<sup>の</sup>。悲<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 直<sup>ら</sup>。おん身<sup>の</sup>憑<sup>を</sup>。久<sup>後</sup>。の。おん身<sup>の</sup>知<sup>る</sup>。おん身<sup>の</sup>月<sup>と</sup>。日<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>送<sup>り</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 つの。おん身<sup>の</sup>並<sup>四</sup>郎<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>北<sup>月</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>影<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>金<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>

耳<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>知<sup>る</sup>。おん身<sup>の</sup>受<sup>る</sup>。おん身<sup>の</sup>思<sup>ふ</sup>。おん身<sup>の</sup>人<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>殺<sup>す</sup>。おん身<sup>の</sup>金<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>畧<sup>す</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 おん身<sup>の</sup>神<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>敷<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>枕<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>睡<sup>り</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 房<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>事<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>及<sup>ぶ</sup>。おん身<sup>の</sup>面<sup>目</sup>。おん身<sup>の</sup>今<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>返<sup>る</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 龍<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>泣<sup>く</sup>。おん身<sup>の</sup>小<sup>文</sup>。おん身<sup>の</sup>吾<sup>も</sup>。おん身<sup>の</sup>亦<sup>も</sup>。おん身<sup>の</sup>嗟<sup>嘆</sup>。おん身<sup>の</sup>堪<sup>む</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 敷<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>理<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>今<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>遍<sup>に</sup>。おん身<sup>の</sup>悔<sup>む</sup>。おん身<sup>の</sup>甲<sup>斐</sup>。おん身<sup>の</sup>村<sup>長</sup>。おん身<sup>の</sup>報<sup>領</sup>。おん身<sup>の</sup>主<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>訴<sup>へ</sup>。おん身<sup>の</sup>地<sup>方</sup>  
 方<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>任<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>船<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>涙<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>勿<sup>論</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>願<sup>ひ</sup>  
 家<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>先<sup>祖</sup>。おん身<sup>の</sup>鎌<sup>倉</sup>。おん身<sup>の</sup>北<sup>條</sup>。おん身<sup>の</sup>家<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>時<sup>に</sup>。おん身<sup>の</sup>名<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>武<sup>士</sup>。おん身<sup>の</sup>侍<sup>り</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 落<sup>く</sup>。おん身<sup>の</sup>百<sup>姓</sup>。おん身<sup>の</sup>侍<sup>り</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>地<sup>方</sup>。おん身<sup>の</sup>村<sup>長</sup>。おん身<sup>の</sup>侍<sup>り</sup>。おん身<sup>の</sup>血<sup>脈</sup>。おん身<sup>の</sup>招<sup>塔</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 個<sup>の</sup>。おん身<sup>の</sup>並<sup>四</sup>郎<sup>が</sup>。おん身<sup>の</sup>故<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>先<sup>祖</sup>。おん身<sup>の</sup>名<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>汚<sup>さ</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 り。おん身<sup>の</sup>今<sup>宵</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>風<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>地<sup>方</sup>。おん身<sup>の</sup>立<sup>放</sup>。おん身<sup>の</sup>外<sup>へ</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
 天<sup>明</sup>。おん身<sup>の</sup>程<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>菩<sup>提</sup>。おん身<sup>の</sup>所<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>村<sup>中</sup>。おん身<sup>の</sup>頭<sup>死</sup>。おん身<sup>の</sup>告<sup>ぐ</sup>。おん身<sup>の</sup>棺<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>。おん身<sup>の</sup>心<sup>を</sup>



所たるもの。死の後の思名を世に誦するも本意なき願ひか如くするや。つら  
 つら頭髪を剪捨てて仕て死親良人の菩提を弔り早晚の業因も  
 減じ。これらのよきを許して許しあふ死根を悪く報へ死許を  
 又と死口説くと小文吾はて頭を傾け親の子の為は隠し子亦親の為は隠し  
 直死とのあつらうその中よりとすく聖の教のよも知らねど先祖の為は良人の  
 悪をせよ知せと願ひの現をあげる心操落涙を感心せりゆれぬ  
 並四郎が亡骸の行包を刺苗を妻をさぐる証入る願ひを聴くと  
 いひく。これの素より人を索ると忙々死旅をまされこれらの訴のつら  
 目と費人の便たるは香華院が乗引きそのもの相計ひ多しな船虫れ  
 げは小文吾と伏拜てめる恩を稟え未明はゆきあはぬ何の日ある報ひと  
 まぎ。これも本意なきゆるし。おの先祖相傳の尺八の傳へ並四郎のく度

售らんとしを推禁る家廟の下壇は秘をぬせめくわれを進めて先商  
 せとのひらと納戸のくま赴た古金襴の袷は納る笛推り末て小文吾がゆり  
 さあまを受とりて細解ひたされ寔は古物とわづらく長サ一尺八分を黒  
 漆は樺巻と吹あはれねのありの音つれまはれ秋の山里とい一首の歌を  
 高時繪はあつる小文吾つらこれをもくも亦いとまやより尺八を好むか  
 虚を僧尺八七長サ一尺八寸この笛亦異ると一尺八分るとえられ必古代の  
 一郎切四五百年の物る。この寶をのり贈らると受られんや且旅され  
 此の物も荷の倍まると難美は是の依収ゆくと返まを取ら頭をち擗り推  
 辞あつらゆるが。ゆりの物腰は袋の中まあ何程の秋ゆらん恩を  
 恩美の因人の重た情は控き一品のま蔵めやとも譲んとゆきもるはこれ  
 も受られま今さう心安らば枉らゆいひと唧々やう薦めや已ね小文吾終



推辞多てあつて再會せん日まであつたの儘に預りおんといふは船虫然ひてゆくて  
疑ひの霽て心のあつたふりて寺へ走りて来たこの亡骸をいせ入棺を買すまで  
片隅へあせせぬ措んと身を掛れば小文五目も亦身を起て死骸を扛て壁際へよせ  
蒲團をもち被さるる行包を引解て件の笛を袂に巻こめて又中結を絡て備まつ  
おきけりとも同は船虫の裳引揚遠く緩々帯を締むり小窓細め推開て天を  
眺て礮と雷鳴か客星の光の高るる曉る中尚程もゆるる菩提所すて十町は足らぬ  
彼処で時を殺すとも天明鳥の鳴り比虫遅くも還りけるべし曉るる殊さう申夜より  
蚊の多くて咽で捨る程のむける樹のありとも有るひる血塗れといふがせ蚊遣火盆  
彼首より鹿角もゆるる林は燻くぬといひらば背門のさう衝と出て菩提所へと  
走りけり畢竟船虫のあつたふりて又いふ物語の其の次の巻を解分るとして知らん

里見八犬傳第六輯卷之一終



